

定期総会開催

3月28日(土)

午後6時より

* 本年は新しい役員を選出する大切な総会となります。
是非ご出席願います。

「役員会」

同日午後4時より

「未念珠作り」に参加して

監事 北村幸

雄

さん、田中善博さんと一緒に
仏壮の研修会（念珠作り）
に参加してまいりました。
場所は八幡別院で私にとつ
ては初めての参加でした。



粕渕征夫さんも参加されておられ、全部で30名ほどで、中には何回も参加されている方もおられるようです。

初めは「念珠作り」と言っても1時間ぐらいで終わるものと安易に事を考えていましたが、やり始めると思ったより難

しく9時30分過ぎから始めて、12時ぎりぎりまでかかりました。

1つ1つの珠に紐を通して、最難関の念珠の一番下にある母珠（親玉）に2方向から紐を入れて1つの穴から出し（Tの字のように）、最後は組紐の原理で紐を編んでいくという工程になります。



やつてみると1つ1つの珠に紐を通すことがまず大変で、作業の初めから難題に直面です。穴に比べて紐が太いために、紐の先を丁寧に削って先に細にして、ボンドで固めて針のようにして、それで通していくという緻密な作業が必要になります。私にはなかなか難しく、薫さんに助けていただくことになりました。

また、最後の工程の組紐の所では幸太郎さんにも教えを請うことになり、結局今回の念珠作りは1人では何もできずに、「皆さん作」となった次第です。

作業の前に念珠についてのお話があり、比叡山で1000日の荒行を何回か成し遂げられた方に「何故念珠の数は108つなのですか」と聞かれた人があったそうです。「それは煩惱の数で・・・」とのお応えになりそうなのですが、「1つの解釈

としてですが、念仏（南無阿弥陀仏）を何回となえたかを念珠の珠を1つ1つ動かして数えていきま
すが、少し多め（8
個くらい）にしてお
くと珠を動かすこと
に集中せずとも、何
回も繰り返している
1回りで100回くら
いではないでしょうか。
たとのことでした。



「仏教（の教え）」とは、あまり難しく考えずに、おおらかな気持ちで、本当に大事な事を継続して取り組むことが大切ではないでしょうか」と私なりに解釈しています。

これは、日々の中でも思い当たる事があったから印象に残っているのだとも思っています。

その後研修をおえた私どもは、寒風の中、近江八幡駅近くでおときをいただき、意見交換をしてまいりま



した。普段なかなかお話をする機会の無い方々とこのような場を持てますのも、仏壮に参加させていただいた縁と感謝しております。

ありがとうございます。

前号からの続き

たしかに「邪見」や「驕慢」の人達までは救うのは無理だと思えます。

では一体、そんな無理な人達とはだれのことをさしているのでしょうか？

○才市さんの慟哭

に「・・あさましあさ
まし邪見きょうまんあく
さいち邪見きょうまんあ
くさいち・・」というの
があります。

妙高人（深くお念仏を悦ばれる人のこと）と呼ばれる浅原才市さんでさえ、自分の事を「邪見驕慢の悪才市」と泣き叫んでおられるのです。

「いわんやこの私などは、
とお浄土に生まれる」など
とはいまだに心底から思う
ことができず、日暮らしを
振り返えればとても仏法を
聞いている者とは思えない
恥ずかしさです。まさに

「邪見」「驕慢」そのものです。



邪見や驕慢の姿勢を、「捨
てなければならぬ」「捨
てなければ信心を受け容れ
ることができない」という
のであれば、それは難行苦
行の道であり、とても私に
できるはずはありません。
またそれは、絶対他力の
法としてもそぐわないとも
いえません。

けれどもお釈迦様は、そ
のように云ってはおられ
ないのです。

○阿彌陀さまの願い

お釈迦様が真に求められているのは、そんな自己中心的で、自分の考えをいつも正しいとする考え方に氣付いて、そのような自分の姿を悲しむ立場に立つてくれよということなのです。

妙高人浅原才市さんが、
自分の事を「邪見驕慢の悪
才市」と呼び、邪見で驕慢
な自分を、あさまいと懺
悔されているのは、すでに
邪見・驕慢に氣付き、自分
の姿を悲しんでいる姿なの
でしょう。

阿弥陀様は、
なものを除くと
いいながら、実
はそのような者



に對してこそ、迷える人々を救わずにはおかぬといふ、熱い大悲の本願をふりそそいでおられるのです。親鸞聖人が、「邪見驕慢惡衆生　信樂受持甚以難」と詠まれているのは、実は「邪見で驕慢なこんな私でも救われていく」という深い感動のこころを詠まれているにほかなりません。とても味わい深いところ

無条件での救済」だけに、すぐには私たちが受入れにくいのも事実です。

私たち人間の世界で「無条件の救済」に近い心が親が子を思う心です。

また人の善意や好意といった心も、それに通じる心でしょうが、そのような心が、なかなか通じにくいのも現実です。

「ただどこかいものはない」なんて言葉もあるくらい

○凡夫のおごりが顔を出す

けれども注意しなければならぬのは、「凡夫だから仕方ない」というのではないのです。

ときどきそのような言葉を耳にしますが、これも凡夫を単に言い訳に使っているだけだ。

るに過ぎず、阿弥陀様の心
を本當に受け止めた言葉で
はなく、やはりおごりの心
に通じるものです。

私たち本願他力のお念仏
の教えをいたたく者が、と
もすればはき違える信心の
むつかしさがここにありま

陀また、阿弥
願が、ご本
「全く



ましてやいのちという最大の
の問題において、「全く無条
件で救うぞよ」と阿弥陀さん
に呼ばれても、「はい、そう
ですか」と簡単にその気にな
れないのも正直な話で、こ
れが私の煩惱なのです。
けれど、これをもってお念
仏のみ教えが難しいというの
ではありません。いただきや
すい信心を難しくしているも
のが、邪見や驕慢の私の心で
あることに気付き、いよいよ
阿弥陀さまの呼び声をたのも
しく受け止めたい
ものであります。

1
月
例
会

住職法話より

